

神戸市須磨区における方言漢字「磨」の研究

岡 墻 裕 剛

A Study of a Dialect Character ‘磨’ at Suma Ward, Kobe

OKAGAKI Hirotaka

1. はじめに

須磨は、現在は兵庫県神戸市西部に位置する区の名称であるが、『源氏物語』での光源氏への蟄居や『平家物語』の一ノ谷の合戦など、古くから歴史や文学の舞台となってきた土地である。風光明媚な地として文人から愛されたと言われ、歌枕としてもたびたび登場する。古代には畿内と西国とを区別する須磨の関が置かれていたことでも知られており、小倉百人一首にも撰された源兼昌の「淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいく夜寝覚めぬ須磨の関守」（『金葉和歌集』冬・270）は特に有名であろう。同歌は、関守稲荷神社に歌碑が建立されているが、須磨区内には他にも多くの歌碑・石碑の類が存在する。

碑文にしばしば登場する「須磨」の「磨」字種に注目して調査すると、康熙字典体の「磨」は見当たらず、常用漢字表の字体「磨」とともに「𠩺」・「𠩻」などが頻出する¹。草書によく見られるこれらの字形は、過去の文献のみならず、現在でも同地域内では景観文字や手書き文字として使用されていることが確認でき、使用者の中には明確に字体意識をもっているケースもあった。笹原(2013)²は、地域特有の字種や特有の字体・用法・音訓をもつ漢字を「方言漢字」と呼ぶが、須磨における「磨」字種には地域に密着した伝統的な漢字の用法が見られ、特に「𠩺」という字体は方言漢字としての性質が強いことが明らかとなった。

2. 須磨と「磨」字の関係について

須磨を詠んだ歌としては、『万葉集』に次の3首が確認できる³。

卷三 譬喩歌413 須麻乃海人之 塩焼衣乃 藤服 間遠乃有者 未著穢（須磨の海女の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず）

卷六 雑歌947 為間乃海人乃 塩焼衣乃 奈礼名者香 一日母君乎 忘而将念（須磨の海女の塩焼き衣の慣れなばか一日も君を忘れて思はむ）

卷十七 雑歌 3932 須麻比等乃 海邊都祢左良受 夜久之保能 可良吉戀乎母 安礼波須流香物

(須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我れはするかも)

いずれも海辺での焼き塩の風景から物寂しさ・侘しさを連想する内容となっている。源兼昌の歌にしてもそうだが流刑地でもあった淡路島に近く、在原行平と光源氏の謹慎蟄居を考えると、少なくとも古代から中古にかけて須磨は単なる名勝地という扱いではなかったようである。「すま」という地名の由来としては、摂津国の西南の隅(すみ)がなまって「すま」になったとする説があり⁴、そもそも畿内でありながら限りなく最果てに近い場所として捉えられていた。

先の万葉歌においては、「須麻」と「為間」という万葉仮名が確認できる。『角川日本地名大辞典28 兵庫県』(1989)では「須末、州磨、須麻、周麻、周間、珠馬、為間とも書いた」、『兵庫県の地名』(1999)では「古く須麻・阪麻・須馬・須間・取磨なども表記」とあり、地名表記が一定しなかったことが分かる⁵。鎌倉時代になると「須磨村」が出現し「須磨」表記が各種文献に見え始めるが、「大中臣景盛愁状案」(1222)では「須馬村」、『明月記』の1231年の内容では「阪麻」と、未だ揺れがある。室町時代以降では、文明・伊京・明応・天正・黒本・易林本の各種節用集に「須磨」と書かれており、「兵庫北関入船納帳」(1445)でも「須磨」が確認できるため⁶、この時期には「須磨」表記が定着し始めたと見られる。比較的早い段階から「す」=「須」があるのに対し、「ま」=「磨」の固定は後の時代になってからのものであることが分かる。

須磨以外に「磨」字がつく日本国内の地名としては、『播磨国風土記』(715)で知られる「播磨」と、同書に示される「飾磨郡」が古い例で、ともに須磨と同じく現在の兵庫県に位置する。『播磨国風土記』は巻首を欠き「播磨」の地名の由来は不明であるが、漢字表記については『世界大百科事典』(2007)⁷の「播磨国」の解説に「国名は《古事記》《旧事本紀》等に〈針間〉と記され、播磨の表記が一般化するのは710年ころ以後である。郡名も飾磨がもとほ(志加麻)、宍粟が(宍禾)などと表記されていた(藤原宮出土木簡、《播磨国風土記》)」とあり、両者ともに好字令に従った置き換えであろう。「磨」は、音読みは「マ、バ」、訓読みは「みがく、とぐ、する」などがあるが、『大漢和辞典』⁸ではさらに詳しく「[𪚩] ①みがく。石をすりみがいて光を出させる」とあり、この点が好字と見なされたものと思われる。また、熊本県には「球磨」という地名があるが、元々は「球麻」だったので、「球磨」表記は『色葉字類抄』(1177-81)に記載がある⁹。このように、地名において「麻・間」などから「磨」へと置き換える例はままあったのである。

さらに「須磨」の「須」に関して言えば、「須」は元々「あごひげ」を意味するが、漢訳仏典で「須弥山」に使われるなど、こちらもやはり好字としての使用が多い。

3. 「磨」の字体バリエーション

続いて、活字資料や字書類などを用いて「磨」の字体規範の変遷を調査する。「磨」は現代の「常用漢字表」(2010)に含まれ、音「マ」と訓「みがく」が示される。例示字体は「磨」で、丸括弧付きの「いわゆる康熙字典体」は

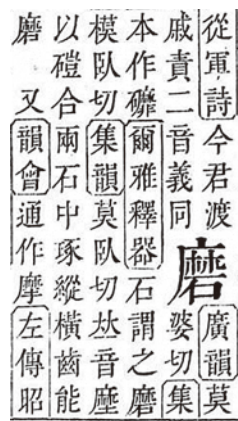


図1 「康熙字典」

示されていない。『康熙字典』¹⁰を確認すると、図1のとおりであった。「磨」ならびに部分字体「麻」の康熙字典体は見出し字でも注文でも一貫して「麻」字体となっている。しかし、「常用漢字表」では「著しい差異のないものは省」くという方針があり、この両者を大きな字体の差とは見なしていないようである。

活字のバリエーションを知るための資料としては、『明朝体活字字形一覧』(1999)¹¹が有効である。「磨」字と、「磨」に類似した部分字体を含む字種数種を図2に示す。

部 首	通光版 康熙字典 1833年	(1) 五華閣府 1820年	(2) 永長老会 1844年	(3) 英華書院 1860年	(4) 英華書院 1873年	(5) 国文五号 1887年	(6) 国文四号 1887年	(7) 築地二号 1892年	(8) 築地五号 1894年	(9) 製文四号 1903年	(10) 製文二号 1906年	(11) 築地三号 1912年	(12) 大坂三号 年代不明	(13) 築地二号 1912年	(14) 築地五号 1913年	(15) 築地四号 1913年	(16) 譯文四号 1914年	(17) 宝文四号 年代不明	(18) 宝文二号 1916年	(19) 宝文一号 1916年	(20) 秀英一号 1926年	(21) 民友35号 1934年	(22) 築地三号 1935年	(23) 朝日漢字 1946年	朝日版 大 漢 朝 1969年	
	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨	磨
	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻	麻
	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广	广

図2 『明朝体活字字形一覧』¹²

(5) 国文五号1887年のみ「磨」だが他は全て「磨」となっていて、近代の活字としては康熙字典体が圧倒的に優勢であることが分かる。他の字種を併せると、(3) 英華書院1860年、(6) 国文四号1887年、(15) 築地四号1913年などに、同一活字内に「麻」と「磨」とが混在する様子が見て取れる。「林」部分をさらに細かく見れば、最後の右払いが「木」に近いものや、上の横棒との接触の有無、ハネの有無などの差異が確認できるが、これらは活字実現上のデザインによる字形差と見なして良いだろう。

これらの活字が使用された明治期の「朝日新聞」を確認すると¹³、図3のように同じ紙面であっても活字のサイズによって二つの字体が併用されていた。これらは全て見出しの大きいサイズが「磨」、本文の小さいサイズが「磨」であった。本文の小さな活字をより簡単な字形にしていることから、活字作成の際の労力削減を目的とした措置だと推測される。

以上のような差異は確認できたが、「常用漢字表」の判断に従ってこれらの差異を微細な字形差であるにとらえるのならば、活字の使用状況からは「磨」字種の字体規範は比較的安定していると言える。

次に、各種のオンラインによる漢字情報データベースの検索結果を示す。幅広い時代・地域における規範的文献の漢字字体の情報を提供する「漢字字体規範史データベース」(HNG)で「磨」を検索すると、図4のようであった¹⁴。

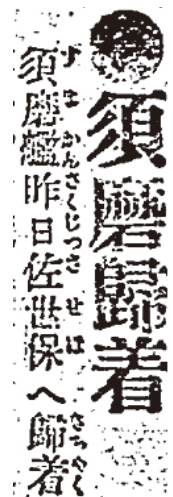


図3 朝日新聞
4460号(明治
31年12月1
日)1面



図4 HNG (CHISEより)

検出されたのは、大陸資料として「大般涅槃經卷十一 (S81)」(敦煌南北朝寫本, 506年) から「法藏和尚傳 (高山寺本)」(南宋版, 1149年) までの左6例, 日本資料として「金剛大教王經卷一 (高山寺本)」(日本寫刊典籍文書, 815年) から「日本書紀卷二・卷二十四 (寛文九年版)」(1669年) までの右7例, 計13文献全てが「磨」字体である。左から5例目「開成石經論語」(837年) が「ホ」形, 7例目の「日本書紀卷二十四」(1669年) が「木」にハネがあるが, これも字形差と見なして良いだろう。

豊富な大陸資料を含む京都大学人文科学研究所所蔵の石刻拓本資料が検索可能な「拓本文字データベース」では、「磨」字種は184例検出される¹⁵。「磨」の混入が1例あり, 「宋篆書千文」(965) に篆書による「礪」が1例あり, やや「磨」に近い「ホ」形が「唐開成石經」を中心に10例ほどある他は, 全て「磨」であった。

主に奈良地方の木簡を検索できる奈良文化財研究所「木簡データベース」では、「磨」は50件検出される¹⁶。翻字によると, 43例が「播磨」の用例である。中には文字がはっきりと判断できないものや, 木簡自体に欠けのあるもの, 「麻」と「石」が縦に2字並んだように書かれたものがあるが, 基本的には全て「磨」字体であった。

さらに数点の資料の検討を加えたい。



図5 『類聚名義抄』

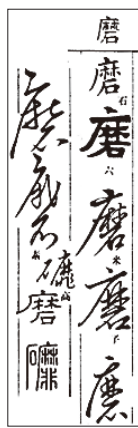


図6 『五體字類』

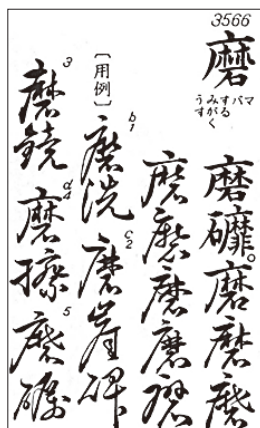


図7 『くずし字用例辞典』

鎌倉時代の和製字書である観智院本『類聚名義抄』(図5)¹⁷では, 見出し字の「磨」以外に正字として「礪」, 俗字として虫損があるが「礪」が掲出される。また, 『五體字類』(図6)¹⁸と『くずし字用例辞典』(図7)¹⁹においても「礪」の記載がある。この字体は, 『康熙字典』と『大漢和辞典』に収録されており, 「磨」の本字とされるが, 本稿での「須磨」表記に関する調査範囲では使用が確認されなかった。「磨」字体のみに限ると, 『くずし字用例辞典』の中に「林」の右側部分が「戈」に近いよ

うな例も見えるが、これはくずしの範囲内の書体差と見なせよう。行草体であっても「磨」の基本的な骨組みを逸脱しない。

以上のように、この字種は「磨」字体が常に規範的な字体として扱われており、字体使用は比較的安定している。康熙字典体の「磨」は、活字には確かな影響があったものの、それ以前には明確には出現しておらず、その後も強くは定着しなかったことが分かる。

4. 須磨における「磨」の調査

4.1. 景観文字調査について

前述のとおり、須磨には文人ゆかりの俳句や短歌の顕彰碑が多数存在する。須磨観光協会のウェブサイトでは8カ所40人分の52の石碑が紹介されており²⁰、「すま」や「須磨」・「須磨寺」という地名表記が多数確認できる。また、このサイトでは記載されていない石の道標や、公園名や史跡名のみを刻んだ石碑、文字が刻まれた寺社仏閣の石柵や玉垣なども頻繁に見かける。

本稿では、須磨区の中でも、山陽電鉄の須磨浦公園駅・山陽須磨駅・須磨寺駅・月見山駅の連続する4駅分の地域を主な調査範囲とすることとした。この地域は江戸時代には西須磨と呼ばれ、須磨寺（上野山福祥寺）、関守稲荷神社（須磨の関跡）、松風村雨堂、村上帝社、須磨離宮公園、須磨浦公園など名所旧跡が多く、須磨の中心地として古くから栄えた場所である。今回の調査でも、多くの石碑類を確認できた。

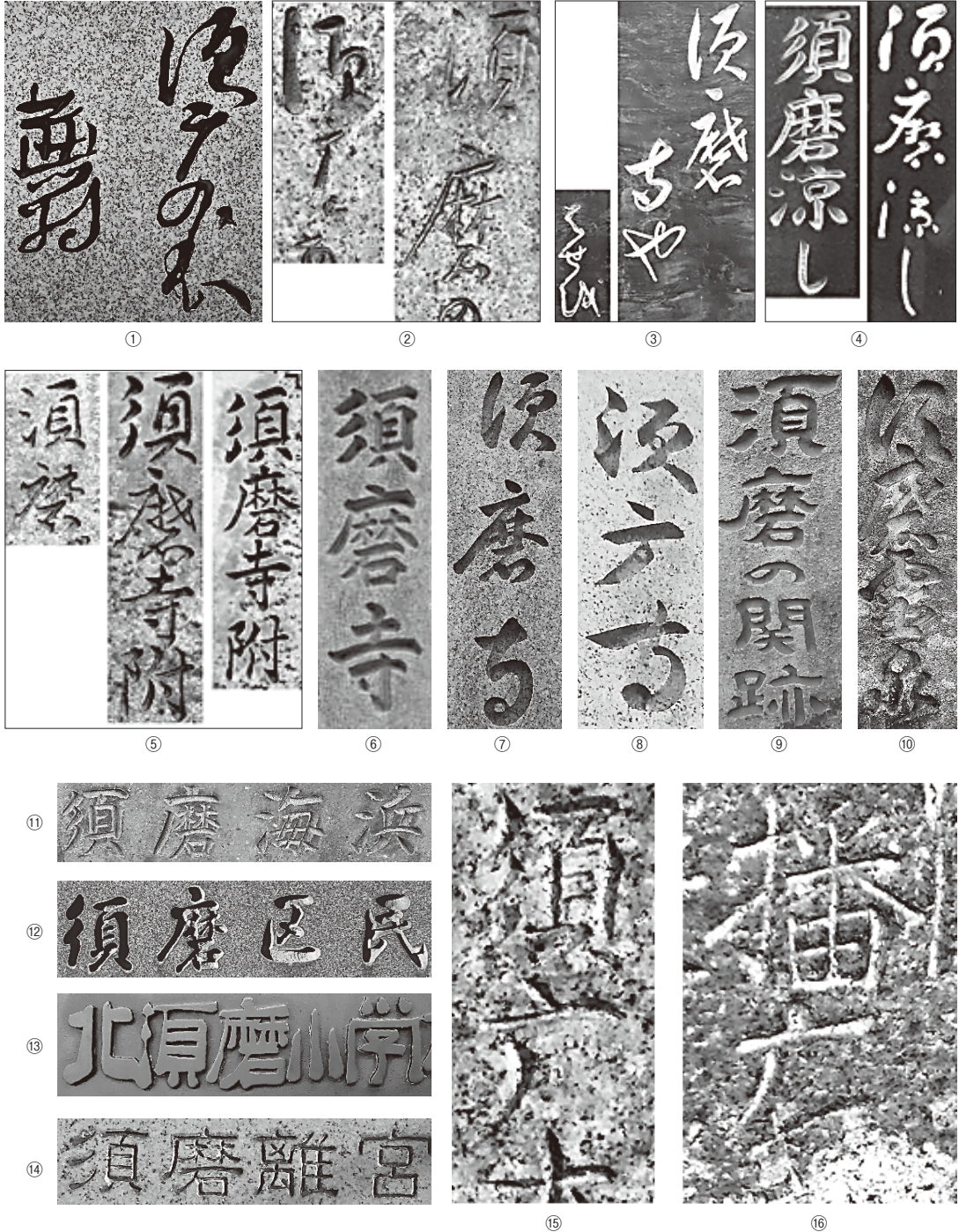
上記サイトに設置年代が明記されている石碑類として最も古いものは、昭和9年9月の正岡子規三十三年忌の際に建立された句碑であり、他のものも昭和時代が多いが、設置年代が不明なものが大多数であった。

調査は、上記の史跡に存在する石碑類と看板の景観文字を中心に、2016年4月から2017年10月までの間に稿者が渉猟して行った。景観文字とは、言語景観調査の一環で行う字体研究に用いられる概念であり、2006年と2012年の京都祇園での「祇」字種の調査に基づく當山（2013）²¹では、「紙でもなく、デジタルでもない、非文献資料」、つまり「バス停の文字・駅の名称・商店の商品の看板・ポスターなど」の文字とされる。前掲の笹原（2013）も一種の景観文字調査であり、こういった非文献資料に地域特有の方言漢字が出現することを指摘している。これらを受けて行った岡墻（2017）²²では、景観文字と手書き文字の両面から、静岡県函南町における「函」字種の字体使用の現状を報告した。これに加えて本稿は、須磨の地域的な特色を活かして石碑類の調査を重点的に行うものである。

以下では、その中で発見した「磨」字種について報告する。なお、原理的に全数調査は限りなく困難であるとともに、本稿の主旨からも字体の使用頻度を正確に把握しようとするものではない。

4.2. 書体についての調査分析

字体について検討する前に、まずは字体より上位の概念である書体について見てみたい。今回調査した石碑類は主に、歌碑・句碑などの類と、史跡名や地名のみを示す門碑・柱碑の類とに大別でき、前者は縦書きの行草体が多く、後者は縦横両方向があるが楷書体に近い読みやすい文字で刻まれたも



① 蕪村句碑 (須磨寺), ② 子規・虚子師弟句碑 (須磨浦公園), ③ 芭蕉句碑 (須磨寺), ④ 青畝句碑 (須磨離宮公園), ⑤ 山本周五郎解説碑 (須磨寺), ⑥ 「大本山須磨寺」碑 (須磨寺参道入口), ⑦ 「須磨寺正覚院」碑 (須磨寺), ⑧ 「須磨寺桜壽院」碑 (須磨寺), ⑨ 「須磨の関跡」碑 (関守稲荷神社), ⑩ 「須磨豊泉」碑, ⑪ 須磨海浜公園門碑, ⑫ 須磨区民センター門碑, ⑬ 北須磨小学校校名標, ⑭ 須磨離宮公園門碑, ⑮ 石柵 (村上帝社), ⑯ 石柱 (教盛塚近辺)

図 8 石碑類の調査

のが多かった。

石碑の文字は、今日では機械で印字・彫刻することもあるが、原則的には手書きによる揮毫に基づいて刻み込むのが一般的である。特に歌碑・句碑では、石碑そのものに芸術作品としての価値を付加するために、楷書体ではなく、個別性の高い行草体を好む傾向がある。今回発見したものの中にも与謝蕪村・正岡子規・高浜虚子といった俳人による自筆を模刻した碑や、芭蕉の句を橋間石という別の俳人が昭和43年〔1968〕に書いたものが存在していた（図8-①②③）。一方、門碑・柱碑に楷書体が多い理由は、より内容が伝わりやすいように文字の判別が容易な字形を用いたのだろう。つまり、前者はあくまでも後世の人間による顕彰のための象徴であり碑文そのものは難解であっても構わないのに対し、後者は表札や商店の看板のように名称を示すという実的な公共性のために誰でも読めるものでなければならない、ということである。このような性質の違いが、書体選択に相違をもたらしたと考えられる。

また、歌碑・句碑には、本文は行草体、解説文は楷書体と一つの碑の中で書体を使い分けるものがあり、これは芸術的価値を左右しない部分の可読性への配慮であろう（図8-④）。さらに一部の碑文では、「須磨」が出現する度にくずし度合いを大きくしていくものや（図8-⑤）、同じ須磨寺の石柱碑であっても参道の入り口付近と境内の出口近辺と奥とでそれぞれくずし方を変えるものが確認できた（図8-⑥⑦⑧）。

筆写の方向に注目すると、行草体は縦書きを基本としていて通常は横書きしないため、石碑でも横書きに用いられないのは当然と言える。一方で、隷書体風を実現されたものは、縦書きにも横書きにもあったが（図8-⑨⑬）²³、隷書は木簡や竹簡に縦書きをするために発達してきた横長の書体であり、こちらも本来は横書きには適さないはずである。しかし、この例では、点画の向きと波磔により隷書体風の特徴をもたせつつ縦長に文字を実現するという特殊な字形が用いられている。石碑においては、碑銘（名称部分）だけを本文とは書体を変えて篆書や隷書で記すことが多いため、学校名という固有名詞についても隷書で示したいという欲求が働き、このような特殊な書体を実現してしまったのであろう。

以上のように、石碑類の書体は、その目的に併せて様々に選択されている。

4.3. 字体についての調査分析

次に「磨」字種を字体レベルで見ると、楷書体では康熙字典体を確認できない。これはやはり、康熙字典体はあくまでも活字における規範であって、手書きでは古くからの伝統的な字体が好まれたということであろうか。3章で見た「磨」の字体変遷の特徴がそのまま表れた結果である。

行書体としては、『くずし字用例辞典』にあった「林」の右側が「戈」に近い例も確認できる（図8-③⑤⑩）。本稿では楷書体における字体とは見なさなかったが、このくずし方の運筆が共有されていることが分かる。さらに行書体では、垂れ以外の部分が存在しない「广」が確認できる（図8-①②⑧）。これは、他の文献でも行書・草書で「广」をもつ字体を表現する際に表れる書き方であり、書体上の略字と言える。

しかしながら、「磨」字では、楷書体の文脈においてもこの形が出現しており、「須磨」と「播磨」の用例が確認できた(図8-⑮⑯)。楷書体での「广」は、日本では一般に「まだれ」と呼ばれる漢字の構成要素(部首)であり、中国では「屋根」の意味をもつ別字もしくは「廣」の簡体字(日本では略字「広」に当たる)であって、「磨」とは区別される。そのため、別字が衝突したと見るべきか、一種の代用字と見るべきかの判断が難しいが、どちらにせよ行草体で使用されていた「磨」の省略形としての「广」が、そのまま楷書に流用されることで発生した異体字であると推測される。

ここで改めて図8の「广」字体に注目すると、左払いのある縦画と上部の横画との接触位置が左端ではなく中央に寄っていることが確認できる。図6・7・8からも明らかのように、行草体としては「广」の横棒と縦払いを1画でつなげて書くことが多いが、図8-⑧では筆画が離れているにも関わらず「テ」にすら見える字形で実現されている。また、図2の『明朝体活字字形一覧』で活字を確認すると、「广」字にのみ図9のような縦棒の接触位置




(2) 米長老会 1844年	(5) 国文五号 1887年	(8) 築地五号 1894年
		

図9『明朝体活字字形一覧』(「广」の一部)

が右寄りになる例がある。微細な差異ではあるが、厳密には「广」とは異なる「广」を書くような意識が存在することが分かる。

類似した形の異体字として、「鑛」の略字「釦」があげられる。近代以降の日本で「鑛」から「鉦」字体が発生する過程を丹念におった山下(2012)²⁴では、栗原市細倉鉦山資料館が保存する「浪人原籍簿」において「鑛」の略字として「鉦」とともに「釦」が使用されることを述べるが、その字形は実際には「釦」のように見える。「廣」という部分字体の省略の例ではあるが、略字としての「广」は、点を横にして縦棒を中央寄りにする「テ」字形で書くことが行われていたのである。

4.4. 文献における調査

「須磨」の略字としての「广」(あるいは「广ナテ」)は、実際のところ広く普及しており、様々な場面で確認できる。まずは古文献や古記録を見ると、神戸市立博物館編(2016)に次の15世紀の例がある。

図10-① 「拾遺和歌集」(室町時代中期, 15世紀写, 京都府立総合資料館)

図10-② 「兵庫北関入船納帳」(室町時代, 文安2年 [1445], 京都市歴史資料館)

両者は手書きの資料だが、①は異なる和歌で同じくずし字が用いられている。②は①よりも草体化の度合いが弱いが、はっきり「广」と書かれている。

次に、神戸女子大学図書館所蔵の和本より2点紹介する。

図10-③ 『一之谷須磨名所記』(錢屋四郎兵衛, 元禄7年 [1694])

図10-④ 『須磨日記』(香川景恒編, 弘化4年 [1847])

③は和刻本で④は写本のようなのだが、ともに表紙では「磨」を用いる。③で示した本文の例は全て別のページだが、「磨」と「广」の両方が出現し、「須」のくずしの度合いもまちまちである。④は本文の行書体と巻末の楷書体の両方で「广」を用いる。

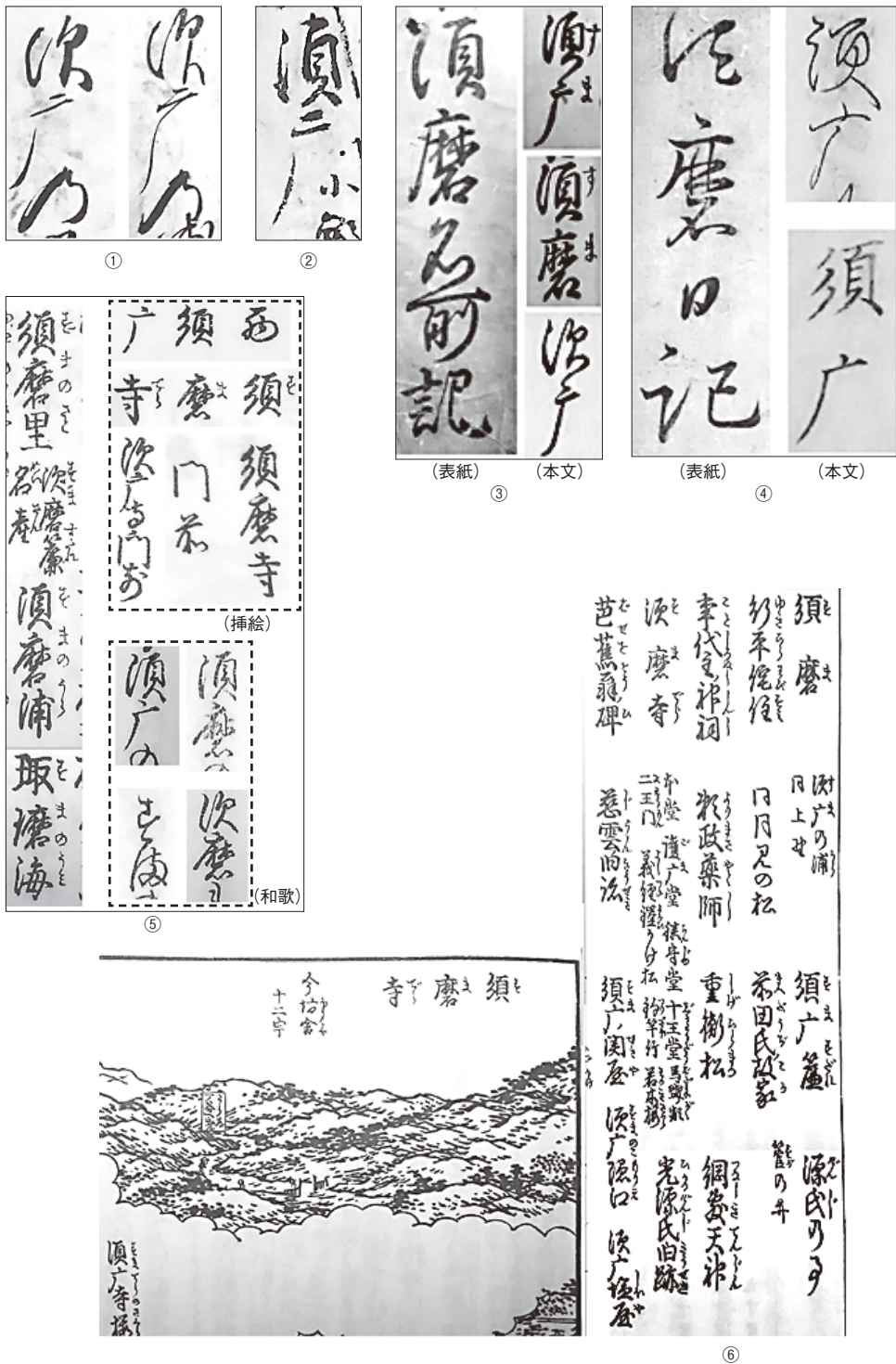


図 10 文献類の調査

名所記に類似する後発の刊行物として、名所図会と呼ばれるジャンルの文献が存在する。名所図会は、日本全国の名所・旧跡・景勝地などについて、その縁起や来歴を記し、挿絵を加えて紹介した通俗地誌兼観光案内書である。『都名所図会』（安永9年〔1780〕）を皮切りに、諸国版が次々と刊行され始め、江戸時代後期に全国的な人気を博した。「須磨」に関する記事がある『摂津名所図会』と『播州名所巡覧図絵』を紹介する²⁵。

図10-⑤ 『摂津名所圖會』（秋里籬島，寛政8・10年〔1796・1798〕）

図10-⑥ 『播州名所巡覧圖繪』（秦（村上）石田，文化元年〔1804〕，大坂書林版）

両者では、ともに須磨に関する地名が頻出するので、ここにあげたものは一例である。⑤の見出し部分では「磨」、挿絵と和歌では「磨」と「广」の両方が出現する。特に⑤の和歌は、同じページの横並びのものであり、いわゆる変字として、意図的に複数の字体表示を行った可能性が指摘できる。⑥でも見出しと挿絵の両方で「磨」と「广」が確認でき、上側・右側の文字の方がくずし方が弱いようにも見えるが、一定の傾向をつかめるほどではない。⑥の4行目中程に出現する「護广堂」では、「广」が「摩」の略字として使用されている。ちなみに、この⑥の文献と、③と④の文献には「摩耶山」についての記述があるが、「广」字体は確認できない。よって「護广」という特定の語彙のみこの略字が使用されることになる。⑤の作者の秋里籬島は京都の人で生没年不詳だが各種の名所図会の作者として知られ、摂津にも造詣が深い人物であったと見られる。また、⑥の作者の秦石田は経歴がはっきりしないが、同書の解説では「播磨にかなり近い、それも播磨のことに精通した人だったように思われる」との見解がある。つまり、どちらの例としても、「磨」字種を使用する頻度の高い須磨・播磨地域に造詣が深い人物であった可能性が指摘できる。

次に、「護广」に関して、『須磨寺「當山歴代」』を紹介したい²⁶。同書の解説によると、この資料は平安末期の嘉応2年〔1170〕から近世の宝暦2年〔1752〕までの間、複数の人間によって書き継がれてきた須磨寺の古記録である。当時の様相が分かる手書き資料として、歴史的・文獻的価値が高い。

この資料では、図11に示すように、貞応元年〔1222〕の記録に「須磨村」(①)、応永34年〔1427〕に「須广」(②)、享保15年〔1730〕に「須磨」・「護摩」・「護广堂」(③)がそれぞれ出現する。「須磨村」と「須广」の表記は、どちらの用例としてもかなり古いものである。「广」の2例は、接触位置が中央寄りの「广」字形になっている。「須磨村」の「林」部分は、左が「？」になっているが、これは行書体のくずしの範疇なのか、そのような部分字体と見なすべきか判断が難しい。

③と④は同一ページに記載されたもので、地震によって大破した護摩堂の建て替えを奉行所に上申したという内容である。ページの本文1行目である④では「須磨」と「護摩」があり、同ページの左端である③には図形つきで小さく「護广堂」と書かれている。行書体ではあるが、④の本文には明確に「磨」と「摩」とが書かれていることから、「護摩堂」への「广」の使用は挿図用の略記とも見ることができ。しかしながら、図10-⑥とともに、同一文献内で「广」が「磨」と「摩」の両方の異体字として使用されている証拠である。「磨」の代用に比べて使用者と使用場面・使用語彙は限定的であった可能性が指摘できるが、「摩」も「广」と省略されることが明らかとなった。

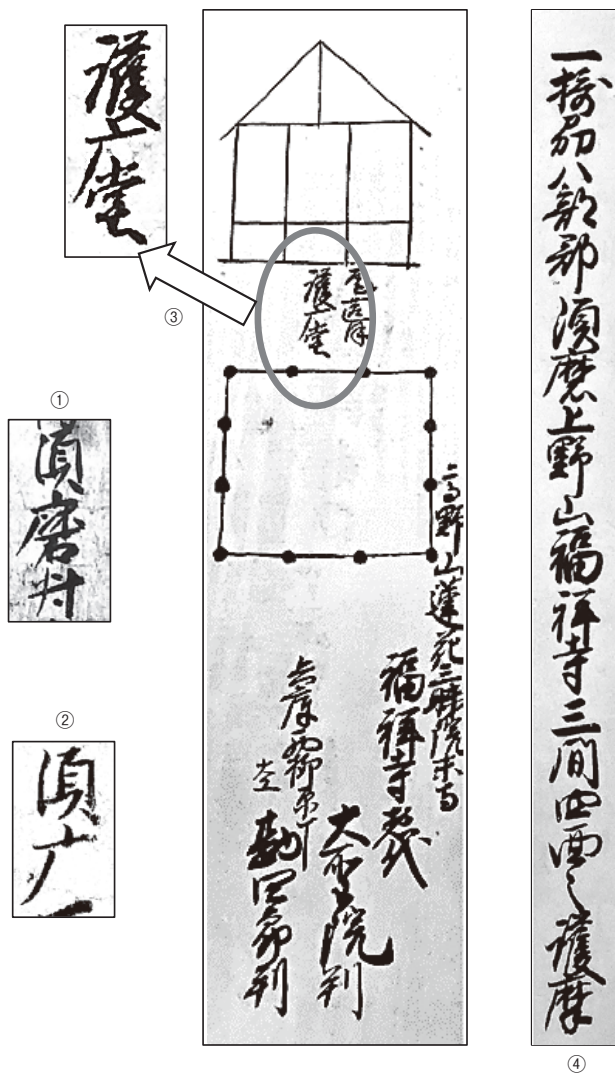
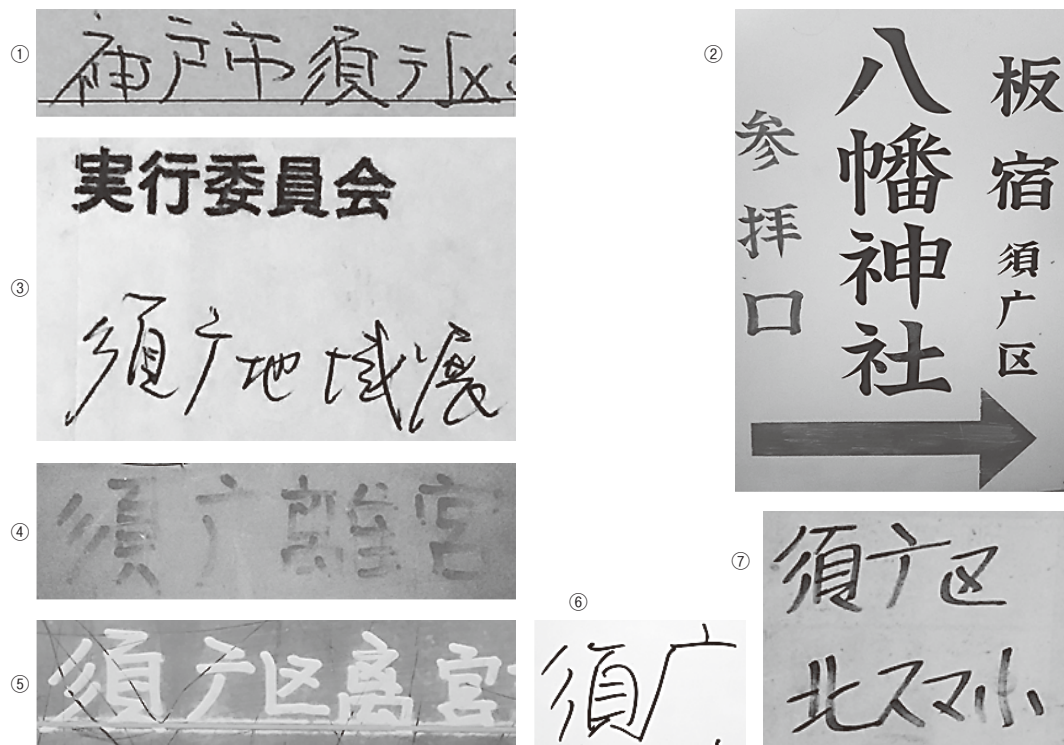


図 11 『須磨寺「當山歴代」』

4.5. 現代の手書き文字の調査

最後に、現代の手書き文字に出現した用例を紹介する。稿者が須磨区内で約200人を対象に行った予備的な書き取り調査では、漢字を思い出せなかった場合を除き、全て楷書で明確に「須磨」と書かれており、字体の揺れは皆無であった²⁷。すなわち、現代では書き取り調査のような改まった場面では、「磨」字体のみが使用されるとほぼ断言できる。

しかし、実際には、手書き文字として「广」を見かけることが多々あるので図12として示す。



⑧ 箇所: 須磨区桜木町3丁目

①返信用封筒, ②八幡神社案内板 (板宿), ③封筒, ④郵便受け (松風村雨堂), ⑤ちりとり, ⑥大学教員のメモ (神戸女子大学), ⑦ロッカーの張り紙 (北須磨小学校), ⑧犯罪発生緊急情報揭示板 (西須磨幼稚園)

図 12 手書き文字における「廣」

①と③は稿者が受け取った封筒に書かれた文字で、書き手はともにこの地域に関係する人物だと判断できるものであった。④はちりとりにマンション名を書いたもの、⑦はロッカーの所有を示したもので、どちらも油性ペンで記されていた。それに対して⑥はホワイトボードの一時的なメモ、⑧は掲示板の文字であり、どちらも一時的な使用である。②は神社の案内板、⑤は郵便受けの住所標示で、ともに公共性がそれなり高いはずだが、一般的な「磨」ではなくあえて略字の「廣」を選択したことになる。⑤は「離」まで「离」と別字で代用されているが、この文字は太い白ペンによるものだったので、繁雑な部分を省略するための措置であろう。②は丁寧な楷書体の中に「廣」が出現しているが、周りよりもやや小さめの文字であるために、やはり複雑な「磨」を書くのを避けたと思われる。

⑧については筆者が特定でき、この文字について詳しく話を伺うことができた。筆記者は、須磨区在住の教養のある60代の女性で、成人後に一時期関東地方で暮らしたことがあるが、基本的には須磨区で生まれ育った、いわゆる「生え抜き」の人物である。この掲示板は、神戸市内に多数設置され

た「犯罪発生緊急情報掲示板」の一つで、近隣で発生した不審者情報や事件等を設置場所の管理者や地域住民が書き記すものである。続報や他の事件情報が発生するか、2週間程度の経過でその内容は削除されるという一時性の強いものである。以下、筆記者の話の要点を記す。

1. この字体は行書風に書いたもので、メモ書きには多用するが、公的な書類や住所の宛先などを書く場合には用いない
2. 子供の頃に地域の大人（おそらく書道の先生）から習った書き方であり、自分の子供たちも自分の影響でこの書き方を身につけている
3. 須磨では昔から普通に見かける字で、年齢層とともに使用率が高くなるように感じる
4. 自分の意識としては「广」ではなく縦棒を中央寄りに「ナ」と書くが、カタカナの「テ」のような形も見かけることがある

どれもこの字体の使用者の言語感覚として貴重である。特に4は、「广」との書き分けがあることを意味し、実際に図12-①の字形がほぼ「テ」で実現されていることから、これらを字体として区別する意識をもつ使用者が存在することの証拠となる。ただし、初画の向きについては「龍-龍」、「音-音」のような字形差とみるべきかもしれない。

1の意見は図12-①③の封筒の例と対立するが、稿者はこれ以外にも領収書の宛名に「广」が書かれる例を発見しており、公共性と略字使用の関係性については個人差があることが分かる。また、「行書風」という表現については、周りの漢字はほとんどくずれておらず、文全体の書体は楷書体に近いため、この字体の出自に対する見解だと思われる。

この聞き取り調査の後に、「广」の他の使用者を数名発見したが、2・3に関してはほぼ同じ意見を聞くことができた。さらに、この使用者たちからは、「「广」は須磨区では昔からよく使われているが近隣の市区の間はほとんど使わないし、そもそも通用しないのでは」との意見があった。

以上から、「磨」の異体字・略字としての「广」は、地域社会での生活を通して知らず知らずのうちに身につけ使用するものだが、他の地域での理解度・受容度が低いという点で極めて方言色が強く、須磨における方言漢字であると見なして良いだろう。

5. おわりに

本稿では須磨地域における「磨」字種に注目し、その字体の変遷と使用状況を探った。本稿の結果として次のことが言える。

- ・「磨」字種は標準的な文献においては安定的に「磨」字体として表現されてきた。（『康熙字典』とその影響下にある活字を除く）
- ・石碑や古文献においては、「磨」の行草体としての「广」と、そこから定着したと見られる楷書体での略字「广」が確認できる。また、その具体的な実現形としては、接触位置が中央寄りの「广」「ナ」「テ」と書かれる場合も多い。
- ・「广」は、「須磨」表記以外にも「播磨」や別字種の「護摩」での使用が確認できたが、その使用者と使用される語彙は限定的である可能性がある。

・「𪛗」は、現代の須磨において手書き文字や景観文字として出現し、字体としての定着度・理解度が高く、一種の方言漢字だと判断できる。

「磨」の類字として「摩」「魔」などがあるが、よく知られているようにこの2字には「𪛗」という略字がある。垂れ以外の部分を音仮名「マ」で代用した形であるが、「磨」にも同じ筆写の経済化が起きて不思議ではない。しかしながら、今回の調査では、「磨」が「𪛗」と書かれる例は確認できなかった。このような相違には、「磨」に対する「𪛗」の存在が影響を与えているのではないだろうか。本稿は須磨における「磨」の字体使用の状況調査に限定したが、この仮説の立証には、例えば播磨・飾磨・球磨や、「摩」をもつ多摩や薩摩といった他地域における調査が必要である。この点については今後の課題としたい。

- 1 本稿では、石塚（1984, 2008）と岡墻（2008）の認識に従い、「書体」・「字体」・「字形」・「字種」を次のように扱う。
書体：漢字の形に於て存在する社会共通の様式。多くは其の漢字資料の目的により決まる。楷書・草書等
字体：書体内に於て存在する一々の漢字の社会共通の基準
字形：字体内に於て認識する一々の漢字の書写（印字）された形そのもの
字種：社会通念上同一のものと認識され、一般的に音訓と意味が共通する相互交換可能な漢字字体の総合
石塚晴通『圖書寮日本書紀 研究篇』（1984, 汲古書院）、石塚晴通「漢字字体規範データベース（HNG）の現状と展望」（2008, 『日本語学会 2008 年度秋季大会研究発表会発表要旨』）、岡墻裕剛「B・H・チェンバレン『文字のしるべ』の研究」（2008, 『『文字のしるべ』影印・研究』、勉誠出版）
- 2 笹原宏之『方言漢字』（2013, 角川学芸出版）
- 3 万葉仮名による表記は、竹柏会複製西本願寺万葉集を底本とする鶴久・森山隆編『万葉集』補訂版（1977, おうふう）による。
- 4 地名の由来は、「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』（1989, 角川書店）に詳しく、「地形にちなんだ洲浜が洲間になったとする説（神戸史蹟講演）、栖間_ミにより居住地を意味する説（日本古語大辞典）、撰津国の西南の隅がスマとなり、のちに諏嚙と改めたという説（地理志料）があり、ほかにもアイヌ語説、諏訪神社のスワの転訛説など諸説がある。撰津のスマ説が有力である。」とある。他にも田辺真人『須磨の歴史散歩』改訂版（2007, 神戸市須磨区役所）、神戸史学会編『神戸の町名』改訂版（2007, 神戸新聞総合出版センター）などが隅説を支持する。ただし、後者の神戸史学会編（2007）は「主な説としてはまず「隅説」がある」としながらも、「ただ、古代にそんな大きな地域を基準とした命名があり得たかどうか」と疑問を呈す。
- 5 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系二九巻Ⅰ 兵庫県の地名』（1999, 平凡社）
- 6 『明月記』に関する記述と、「大中臣景盛愁状案」と「兵庫北関入船納帳」における字体の確認は、神戸市立博物館編『特別展 須磨の歴史と文化展—受け継がれる記憶—』（図録）（2016, 神戸市立博物館）を参照し、節用集の漢字表記は、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版（小学館）を参照した。なお、「兵庫北関入船納帳」における「磨」は厳密には「𪛗」字体である。
- 7 平凡社編『改訂新版 世界大百科事典』（2007, 平凡社）
- 8 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第2版巻8（1989, 大修館書店）
- 9 前掲『日本国語大辞典』によると、二十巻本『和名類聚抄』（934頃）に「肥後国〈略〉球麻〈久万〉」とあり、『色葉字類抄』・易林本「節用集」に「球磨」がある。
- 10 東京大学東洋文化研究所所蔵清朝版『御製康熙字典』（内府本、パーソナルメディア株式会社による電子データ）
- 11 文化庁文化庁国語課編『明朝活字字形一覧 1820年～1946年』（1999, 大蔵省印刷局）

- 12 便宜のため、一部配置を変更した。以下の図では配置のみの変更は特に明示はしない。
- 13 新聞検索には、「聞蔵Ⅱビジュアル」(<http://www.asahi.com/information/db/2for1.html>)を利用した。
- 14 HNG (<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>)ただし、2017年10月31日現在ではデータベースが停止中であるため、HNGの情報が検索可能な「CHISE IDS 漢字検索 -CHISE project」(<http://www.chise.org/ids-find>)を利用した。
- 15 京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料 拓本文字データベース <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/djvuchar> 2017年10月31日検索
- 16 奈良文化財研究所 木簡データベース <https://www.nabunken.go.jp/Open/mokkan/mokkan.html> 2017年10月31日検索
- 17 天理図書館善本叢書 and 和書之部編集委員会編『類聚名義抄』観智院本(1976, 八木書店)
- 18 法書會編『五體字類』増補11版(1937, 西東書房)
- 19 児玉幸多編『くずし字用例辞典』普及版(1993, 東京堂出版)
- 20 「須磨観光協会 - 句碑・歌碑」(2017年10月23日閲覧, <http://www.suma-kankokyokai.gr.jp/modules/gnavi2/>)では、関守稻荷神社, 現光寺, 網敷天満宮, 松風村雨堂, 須磨浦公園, 須磨寺, 須磨離宮公園, 禅昌寺の8カ所における源兼昌, 藤原俊成, 藤原定家, 正岡子規, 松尾芭蕉, 似雲, 矢村三生, 在原行平, 大久保些景, 高浜虚子, 松笠要, 松瀬青々, 草野藤次, 五十嵐播水, 与謝蕪村, 旭叟史, 伊丹三樹彦, 磯江朝子, 三好兵六, 山本周五郎, 小河六平, 真鍋豊平, 神田松雲, 横屋西月, 大井広, 竹本旭子, 陳舜臣, 白崎弘皓, 尾崎放哉, 柳汀, 良寛, 瀬川露城, 安東聖空, 海士のたね平, 五十嵐哲也, 阿波野青畝, 伊藤博文, 一山米翁, 宍戸忠彦, 滝瓢水の40人の句碑・歌碑が画像と解説つきで閲覧できる。
- 21 當日日出夫「景観文字研究のころみー「祇園」の経年変化を事例として一」(2013, 高田智和・横山詔一『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』, 彩流社)
- 22 岡崎裕剛「静岡県函南町における方言漢字「函」の研究」(2017, 『神戸女子大学文学部紀要』50, 神戸女子大学)
- 23 正確には石碑ではなく, 小学校名を浮き彫りにした金属プレートによる校名標。
- 24 山下真里「異体字が広まる一過程ー「鉦」という自体を一例に一」(2012, 『訓点語と訓点資料』第128輯, 訓点語学会)
- 25 臨川書店発行の『版本地誌大系10』(1996)と『版本地誌大系8』(1995)による。
- 26 三浦真巖編『須磨寺「當山歴代」』(1989, 校倉書房)
- 27 神戸女子大学の在学生約170人と近隣の住民約30人を対象に, 複数の漢字の書き取り形式で行い, 設問「すまりきゅうこうえん」への回答として情報を入手した。調査対象者が概数なのは, 1枚の解答用紙に複数人と見られる筆跡が確認できたことと, 同一人物が複数枚に回答を行ったものが含まれているため。

キーワード：方言漢字, 字体規範, 字体変遷, 須磨, 摩, 摂津名所図会